

上野瞭の『砂の上のロビンソン』(新潮社・一八〇〇円、一九八七・五)五九二ページをもつて、そのスピードで読んだ。



上野 瞭氏

男が大統領になり、核のボタンを押すことを知ってしまう。殺すしかない、というふうに進む

家族という人間関係の荒廃

大人にとって必要な『児童文学』

上野瞭の『砂の上のロビンソン』

児童文学の上野瞭というイメージから、あるいはプロットの展開のしからしめるところから、加速度的に家族が崩壊するのの立ち合いながら、必ず大団円がくる、はやくそこへ、駆けつけるように読み進んでしまおう。

が、成功するかどうかはペンディングだ。実際、カーターが大統領になったのだから成功するに決まっているのだが、そこに不安をのびこませるのに作者は全力を

の『デッド・ゾーン』(新潮文庫)ではそうはいかない。相手の身体に触れるとその者の運命が判ってしまふという不幸な予知能力をもった男が、偶然大統領候補と握手をして、その

あげる。そして最後、やっぱり狙撃に失敗して逆に護衛たちに射殺されてしまう。だが、そのネオナチばりの大統領候補は、何発も射たれる弾を避けるのに、聴衆の母親が抱いていた赤ん坊を奪い取って盾にした。その新聞写真によって大統領候補の政治生命は完全に息の根を止められる。暗澹とした現在に鮮やかな希望がホッと投げ込まれてくる。また捨てたものではない、卑劣さに対する反応は健全だったのだ。

上野瞭のエンディングはどう。次の大事故は原爆を四〇

「ブザーバー」である(『史上最悪の核汚染』サンケイニュースブック)。

から、大人に必要な児童文学は出立する。当然にも子どもは十全にはわからぬ、意想外な、しかし生延びるヴァイタリティのシンボルとして要請される。

児童文学に入りたい

子どもをシンボルに

広瀬隆が懸命に説いてまわっているように(『危険な話』チェルノブイリと日本の運命)八月

進」を歩んでいることになる。そして原因は核兵器のボタン押しや原爆事故だけではなく、ダイオキシンだの大気汚染だの、その他もろもろであることを私たちの理性はとくに承知しているのである。

上野瞭の評論『ネバーランドの発想』(一九七二)は、ピーターパンの作者バリーの再評価の作業を通して、大人に必要な児童文学へのレールを敷いた。とはいっても、同じ年の『現代の児童文学』(中公新書)のあとがきで、上野が語りかけている大人の中には「児童文学を切実に求める大人」は出て来ない。もっともこの時代、三百枚を越えたら児童文学ではないとか、児童文学は文学の付録などという潮流と闘っていたのだから、それは無理もない話なのである。

か。あっちこちつながって、二家族の絆はそれぞれ回復し、一組のカップルが誕生し、記念のピクニックとあいなる。小市民的幸せがあふれてきたそのとき、携帯ラジオがチェルノブイリらしき事故の臨時ニュースを報じる。規模不明である。そのニュースを「だれも聞いていなかった」。

基持つフランスか、三基持つ日本かが、ある妥当性をもって予測されている。「日本の原発から少なくとも一回、事故による放射能流出があった。原子炉はすべて、人工密集地、漁場や海岸の近くに建設するほかはな

このような状況のもとで、大人にとって必要な児童文学という設定が論じられているのだ。理性が大人に振り分けられるものならば、理性は頼りにならない。それは大人が頼りにならないのとほとんど同義になっている。社会を大人がつくっているのであれば、現社会は消滅を望まぬかぎり解体するしかない。カギは子どもにある。

私は、『砂の上のロビンソン』を児童文学に入れた。そして勝手な話だが、入れた上で不満が残る。チェルノブイリを最後にもってきて、読者を底なしの奈落に向うジェットコースターに乗せるのではなく、そこから児童文学作品は始まると思えるからである。

児童文学

最 首 悟

家族という人間関係の荒廃の極から帰還したとたん、未来が消えてしまふ、そのことに主人公たちはまったく不知である。

また頻りに地震に襲われていく。これは原子炉を暴だしく破壊する恐れがある。さらに廃棄物処理という難問もある。廃棄物処理のため英国の施設を借りようとする試みは英国の敵意と衝突した」と書くのは、英紙「オ

常識とは逆に、つまり(人間)赤ん坊・子どもは無力であるという見方をひっくりかえして、放り出しても自然の中で生きていく存在とらえるところ

ただし、登場してゐる浮浪者群像は秀抜。(さいしゅ・さこ)氏(東京大学助手・生物学専攻)